カレアを見送り、ヨシュアはテーアルに端切れと後を放 窓から棚める空封青く螢みきっていず。冬れやってうる り出しま。人間以お向き不向きというもの休まる。 Eシェ なら、茶を新け汁自腸の敷りを流しこむ。 「いやあ、行ってくるね」

ヨシェアお渋み、猷具を受け取る。

午前中いっれい町種い間んであれば、カンでから返って

ちかのお苦笑いかある。

思いきり、戸外の空気を吸いこんだ。 た。肩が無事な右手だけを上げ、伸びをする。ヨシュアは りそそぐ。足は痛むが、歩行を続けられないほどではなかっ 家の扉を押し開けた。途端に温かな日差しがヨシュアへ降 前の穏やかな快晴である。ヨシュアは室内に飽き飽きし、 畑の土と堆肥が臭気を放っている。それらを抜ければ、

年る

214

ン、楠樹暖様(@kusunokidan)の作成図を使用して

います

根のふき替えに忙しいのだろう。 ヨシュアは、さらに外れて森の薄闇へと足を踏み入れた。

さきほどまでの陽気が嘘のように森は、冷え冷えとしてい

村を一巡している道へ出た。誰もいない。みな集会所か屋

中央の広場に屹立している透明な筒である。

野の端で赤い花びらが揺れている。ヨシュアは思わず、身 ないよう注意しつつ、木々で狭まる風景に目をやった。視 ヨシュアの前に村の境を表す石が並べられている。越え

その時、木々の間から黒い影が姿を現す。ヨシュアを突

「一人ジャ不自由

さらもが

というな。

退回

うさに

りは

こし

しい

これ

いっ

これ

に

いっ

に

いっ

に

いっ

いっ

に

いっ

に

いっ

に

いっ

に<br

うから蘇物の練習できしてて

ヨシュアの前い

温切れと

強、木綿糸が一本、並べられき。

「かまかないけど」

一十四年?」

きりと『1』、『4』と記されていた。

「うん。だから、もうああいうの飽きちゃった」

エリは、この村の最古参である。しかし、他の者と変わ

明日、エリの家の屋財をそき替える予定がとけしてお

らず、子供のままだった。

「どうして村の境を越えようとしたの?」

言い淀むヨシュアにエリは、首を傾げる。

エリね、青白い随い厳笑んを容化グアいる。

ここで、「多いっぱいヨシュトコ留守を預けるつきりらし

る。振り返ったヨシュアの目に天へと続く柱が輝いていた。 故のない恐れがヨシュアを苛んだ。慌てて目を逸らし

森の奥へと歩んでいく。

引らをい かく 単独して見かれ。 糸 沿 等 間 嗣 い 中 交 貫 通 し こ

「自公の朋多鰤えなんによら大変針も。 土手 > かきるよう

※多財き、けしてお後を市へ留めま。

「ーム」、運運、ハは」

| 自分の服务等でもでは「古代の服务等では」| はなっさらまやいつけき繋ぎるは」

けていいますでは、後にコネタ風している。 誌で目む

合語合 ------ 6 排巾

増お四国表行、本長お憂い巨シェスの三部おある。 1半 長、法とう劉弘し、計量をよる本権等。 ヨシェアお箸を窓襲りつけき。 「間抜ひ! クタバレ!

へ向むている。しかし、増ね急っておまらず、歯をむき出 しているはわできな你に式。大式さな林の宅鸛を貼にてい アログロを回じてはいないないない。関を囲い、関を国に 。 いつら 手料料の ひずらいろめ

き飛むし、聞きな魰獸コ駐ハゆにす『大』げにす。

校をるエリ幻、掌玄Eぐエての前へ気わる。大きうねこ

預じらす。 よういいけくば、まま」

その様子を眺めていたヨシュてが尋ける。 薄荷の香りが 塗り薬の容器から 放されていた。 「きみね人らなくていいの?」

なっている。ひしてささむ、屋財のそき替えいついて簫舗 集会所の一角でヨシュアは、手当てを受けていた。路屋 災難然ったは

> くる。ヨシュアは周囲を見回した。 湿った森の空気の中を苔に混じって、甘い香りが漂って

思った途端、地面に叩きつけられる。ヨシュアは肩の痛み アの足は香りの行方を追いかけた。だが、赤い花を見たと 「足元に気を配って。意外なところに生えてるんだから」 身を屈め、カレブはキノコの採集に夢中である。ヨシュ

り声に二人の耳は聾された。牙をむき出した獣が二人から 倒れているヨシュアにカレブがかけ寄る。恐ろしいうな

ヨシュての言葉コエリお固く目をつむり、頭を張る。 「ーくる響 ームエベビ」

鳴って入ってきさかしていヨシュアは、筋いた。

「うん。赤い花が咲いてて。そこまで行きたかった」

「こういのなりなくないのでしょう」

「おかいい、かいい」

「あれん、ここは来る前はやっさことなんだと思う」 エリは目を置っていた。

「きみお夢を見る?」

とうとうないないは、はくは、ないならないはっちいいし ヨシェアき自分の掌い帰られた数字を眺める。 だ。この材は、両なのかって「 エリの値を沿山まった。

エリは吹き出した。

は村の境を守ってる。境を越えてくる怪物と争ってるのさ」 がいるんだ。ぼくたちを食べちゃうんだよ。それで犬たち 「きみって、なんだかすごいねえ。森には、恐ろしい怪物

れほどでもないと思うけど、どうかな?」 「肩を動かしちゃ駄目だよ。足は、固定したから痛みはそ 肩と足に包帯を巻いたヨシュアは満身創痍だ。エリに手 頭を掻こうとしたヨシュアは顔をしかめる。

伝われながらシャツに袖を通す。袖のボタンを留めていた

カレアコ曲もほこされ、ヨシュア却材へと見られ。 いる。手球に事情を書いてはく 羊の海暑

こると、ヨシェト。来い言ってはも知身かった。林の黄 **体ご出去ら類目なる学。大きさわ、知うら多や・アクパア** 「あーあ。 林嶽 7 言いてわらげきゃっ おは。 かき、 大文夫 ややアロゆら光を発し、その掛ね、真面や73空を貫く。 いる人針もと帰風なほほなないから

少し離れ、赤い目でこちらを睨んでいる。

入ってこれない」 をひねったらしく、まともに歩くことはできない。 「駄目だよ。動いちゃ。じっとしてて。どうせあそこから ヨシュアは立ち上がりざま、苦痛に悪態を吐いた。足首

天へ口を開き、遠吠えを始める。 残った目をヨシュアへ向けていた。しかし、次の瞬間には いる獣の片目は潰れている。顔を曲げるようにして傾け 土の上に石が並んでいた。その外側から身をのり出して

ヨシュアは目を置った。



に悲鳴を上げた。 「ヨシュア!」